

平成21年6月5日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17602010
 研究課題名（和文） 小中高生の生きる力を高める芸術系総合学習のカリキュラム開発・過疎地域と芸大の連携
 研究課題名（英文） The collaboration between a depopulated area and an art college to develop art education programs for the children of the area.
 研究代表者
 松原 哲哉（MATUBARA TETSUYA）
 常磐大学・人間科学部・准教授
 研究者番号：60351368

研究成果の概要：芸大と過疎地域の連携を目指す研究メンバーと芸大生が、地域の小中高生用の芸術系総合学習プログラムを作成するため、始原的な創造力を持つ「お窯」の制作やその実地的な活用を含む「ものづくり」の実践を京都市右京区の黒田村で展開。この試行をもとに、過疎地域の潜在的な価値を大学生と地元子ども達が協働し、4種の「お窯」を使って再発見する「お窯プログラム」を開発。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	800,000	0	800,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,500,000	570,000	4,070,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：「総合的な学習」のカリキュラム開発

キーワード：お窯プログラム、五感錬成、過疎地域と大学の連携、地域特性の再発見

1. 研究開始当初の背景

この企画を始めるにあたって、問題となる2つの背景があった。

(1) 先ず最初に、現在、全国の中間山村地域で進行しつつある過疎化・高齢化を挙げなければならない。今回、本研究グループに試行的な実践活動の場を提供してくれた京都市右京区の黒田村は、平安時代より御用林を保有する京都でも屈指の良材の産地だが、昭和50年代より国内に多量に流入した安価な輸入材に押され、主幹産業の林業が大きな打撃を受けた。その結果、新たな働き口を求め

た村人とその家族の離村が相次ぎ、村の活力低下が顕著になってきた典型的な過疎と高齢化に悩む地域である。

この村には、研究代表者の前任校、京都造形芸大の学生研修所があったことから、放棄された山林や田畑の荒廃や児童数の減少による黒田小学校の廃校といった厳しい現状を目の当たりにし、村の衰微を嘆く住民の声を直に聴く機会を得ることになった。

(2) 次に挙げなければならないのは、芸大生が卒業後も抱き続ける「ものづくり」への強い欲求とその継続の難しさである。

一般に芸大生は、卒業後も「ものづくり」

と関わっていたいと望む傾向がある。実際、卒業後もアルバイトをしながら、市内の手狭な下宿で、様々な作品や道具類に居住スペースを占拠されつつ、細々と「ものづくり」を続けるものが少なくない。

そこで、黒田村のような過疎地域と芸大生が結び付き、それぞれの現状が抱える問題を相互扶助的に解消する方法を模索し始めた。つまり、芸大生は、彼らが持つ「ものづくり」の力によって過疎地域の再活性化に協力し、逆に過疎地は芸大生に、「ものづくり」活動に必要な広い空間や、その環境が顕在的・潜在的に持つ「ものづくり」の可能性を供与するという体制作りである。このような両者の状況が、本企画の背景となっている。

2. 研究の目的

過疎地域と芸大の相互扶助的な連携を継続し、上記の問題点を改善していくためには、その実践の指針となるプログラムの存在が不可欠である。そこで、本企画は、以下の2つの条件を満たす「ものづくり」プログラム作成を目指した。

(1) 両者の連携が持続的かつ有効に機能するため、このプログラムに参加する芸大生と過疎地域の人々、なかでも子ども達が、対象地域の生活・伝統・自然における美質を発見もしくは再発見し、その地域と永続的に関わろうとする意思を育む内容を持つこと。

(2) このプログラムの「ものづくり」が、芸術分野における絵画・彫刻・建築といった狭義の造形行為を指すのではなく、対象となる過疎地域の風土や人々の生活の知恵に深く根差したものであること。

3. 研究の方法

上記の「ものづくり」プログラム作成のため、黒田村自治会を始め地元の人々の多大の協力と教授を仰ぎながら、本企画の研究メンバーとの学生達を中心となり、黒田村を主要なフィールドに平成17年から平成20年までの4年間で、以下の試行を実施した。

【平成17年度】

「ものづくり」の実践に先立ち、以下3つの企画を実施した。

(1) 「ものづくり」の基礎となる五感の錬成講座。具体的には、研究協力者のオーディオ機器の専門家、寺村幸治と声楽家の高島依子を招き、オーディオ機器による人工の音、自然の音、人間の声を通じて、音と五感の関連を探求する2日間のワークショップを黒田村で開催。

(2) 芸術とは何かを問う2つの講演の開催。具体的には、ナポリの古文書研究家・美術家

であるジュゼッペ・ゼーヴォラ氏を講師とした描画の原初形態に関する講演、および現代美術家、ヘルマン・ニーチュの芸術と聖贄の思想を論じた美学者、ロベルト・テロージ氏の講演。

(3) 研究分担者、椎原保の指導により、京都造形芸大・成安造形大・大阪芸大の学生達が、毎年8月15日に実施される黒田納涼祭でのアート・パフォーマンスと黒田小学校の旧校舎を利用した一連のアート・イベントを含む「黒田アートプロジェクト」を開催。

【平成18年度】

地域環境に根差した「ものづくり」の可能性がどのように開かれているのかを探るため、学生達と共に、以下3つの企画を実施した。

(1) 黒田地区の自然環境の観察。具体的には、片波自然観察インストラクターの伊藤五美と研究分担者の地質研究者、原田憲一を講師として、黒田地区の片波川源流域の特異な伏状台杉群とその周囲の動植物や地質の現地観察を春季と秋季に実施。黒田の森の特性を理解すると共に、先人が培った自然との共生の知恵を体験できる機会とした。

(2) 黒田村の伝統的な遊びに関する調査。具体的には、研究分担者の地域学研究者、中路正恒、環境デザイン研究者、下村泰史、寺村幸治の指導で、学生達が伝統的な遊びに関する現地での聞き取り調査を3度にわたり実施。さらに、古老の指導による手作り漁具を使った鮎取りや伝統的な鮎踏み漁に参加。

(3) 学生達と本研究メンバーが黒田村自治会と協働しながら行った、以下3つの納涼祭再活性化の取り組み。

① 祭り会場の入り口に架かる大アーチと櫓の周囲を飾る灯籠の制作。

② 祭りのメインイベントである「松上げ」に使用する縄付き松明作りへの参加。これは、藁縄を編む貴重な生活技術の伝承の機会にもなった。

③ 祭り当日の創作料理店の出店、盆踊りや「松上げ」参加による村人との交流。

【平成19年度】

前年度と同様、「ものづくり」による納涼祭への事前からの協力と参加をおこなった。

これに加え、これまでの活動を振り返りながら、芸大と過疎地域の連携の中で、両者が相互に何を提供し合えるのか、3度にわたって村人と討議を重ねた。その結果、4種の「お窯」(パン焼き窯・炭焼き窯・登り窯・竈)を制作し、地域再生に活用するプログラム、「お窯プロジェクト」案が提起、採用された。

お窯を用いる利点は、以下の3点である。

(1) 「お窯」は、始原的な創造力を持った「火」を使う「ものづくり」の原点に位置する道具であり、かつてはこの地域でも「炭焼

き窯」や「竈」が用いられ、村人の日常生活と深く結びついていた。

(2)「お窯」は、自然に恵まれた過疎地域の環境資源を循環的に利用し、その中で環境を見つめ直す機会を与えてくれる極めてエコロジカルな道具である。

(3)お窯の「火」は、「ものづくり」の力に留まらず、周囲に人々を集わせ、結びつける親和力を備えている。また、様々な身体感覚を働かせる必要がある「火」加減の調整は、またとない五感錬成の機会を提供する。

【平成 20 年度】

「お窯プロジェクト」案の構築を目指して、以下 2 つの企画を実施した。

(1) 京都造形芸大の陶芸研究室教授、吉川充の指導により、黒田村にある大学の作陶用施設を利用しおこなった 4 回の陶芸講座。ここでは、参加した黒田村の老若男女、約 40 名が一連の作陶作業と講習会を体験し、自ら制作した陶器で自らの生活をデザインする可能性を模索した。

(2) 石窯制作家、竹下晃朗の指導により、黒田村の人々と京都造形芸大の学生が協力し、夏休み中にパン焼き窯を村の中央広場の一角に設置。さらに秋の野菜祭りで、黒田産の米を製粉し、間伐材を薪に利用してこの窯で黒田地産のパンを焼き、好評を博した。

①自治会を中心に結束する村の男性陣の「マンパワー」

②彼らの高度な左官・大工技術が示す村人の「ものづくりパワー」

③地産の特製パンの開発と子ども達の食育を目指し、村の女性陣が立ち上げたパン焼き研究会に見られる「ウーマンパワー」

以上 3 つの「村の底力」が大いに発揮されることになったこの企画は、参加・協力した村の子ども達や学生達に、「生きる力」を学ぶ絶好の機会を提供した。

4. 研究成果

上記の黒田村での試行に加え、平成 20 年度より赴任した茨城県の常磐大学で、県北の過疎化問題に積極的に取り組む常陸太田市の市役所と青年会議所が企画する各種事業に参加した。

その結果、4 種のお窯を活用した大学と地域の連携による地域再生プログラムを得た。その内容(記号を一部変更)は、以下の通り。本学と同市の間で今年 5 月 29 日に交わされた包括連携協定の調印式上で、これを同市へ提出。現在、同市役所内の市民協働推進課を地域との連絡窓口とし、実施に備えている。

その具体的な内容は、以下の通り。

「お窯プロジェクト・イン・常陸太田」
—「火」による里山の「木」・「土」・「水」再生の取り組み—

常磐大学健康栄養学科准教授
松原 哲哉

【本プロジェクトの背景】

常磐大学は入学者の 9 割以上が茨城県の出身者で占められ、卒業生の大部分も地元での就職を希望する典型的な地域密着型の大学であり、開学以来、地域に対する貢献と実学を教育の基本理念とし、地域とともに歩んできた。

だが他県の中山間地域と同様、本学が拠点とする茨城県の北部では、'70 年代から始まる安価な国外産の農作物や木材の大量輸入によって地元の主幹産業であった農林業が衰退し、有効な打開策を見出せぬまま深刻な地域の高齢化や過疎化が進行している。その結果、管理の行き届かなくなった里山では、人と自然が協調し、営々と築き上げてきた「命」の連鎖が着実に崩壊し、荒廃の兆しははっきりと認められるようになってきている。これまで慈しみ、保持されてきた山林・田畑・河川が放棄されて荒び、美しい景観が様変わりし、さらには後継者の不足によって、地域で長年にわたって培われてきた自然との共生の知恵や技、独自の有形・無形の文化的伝統も、今や存亡の岐路に立たされているのだ。

この窮状を打破するには、企業誘致はもとより、各地で流行のグリーンツーリズムに代表される地域の自然資源や農業資源の観光化といった、外部からの資金や活力の導入に依存する外発的な対策に留まらず、地域自身の持続的かつ内発的な活動が是非とも必要となってくる。

その際、とりわけ重要となるのが、地域に根差した教育機関の果たすべき役割であろう。地域と誰よりも深く関わり、地域を最も良く知る人々と協働しその特性や価値を再発見し、地域の日々の生活で活かすことのできるシステムを開発していくこと、さらにはその実践なかで地域の次代の担い手を育成していくことが、教育機関の大きな使命として強く求められているのだ。

このような要請に応えるため、本学では従来の学科に加え、地域政策学科やヒューマン・サービス学科、コミュニケーション学科といった地域の活性化や人的交流、情報発信を専攻研究テーマとする学科を設置し、さらに昨年度より地域の「食」指導を担う人材の育成を目指す健康栄養学科と、大学の地域での活動を支える窓口としての地域連携センターを開設することにより、その体制強化に積極的に取り組んできた。

今回、常陸太田市との間で交わされる包括

連携協定についても、本学学長の高木勇夫や総合講座教授の横須賀徹が、かねてより連携構想を抱きその基盤を固めてきたが、昨年6月より健康栄養学科所属の松原哲哉、小関一也が同市の青年会議所や市役所の企画する各種事業に参加した他、9月には同学科長の千葉茂が「市民フォーラム」で、11月には地域政策学科長の林寛一が「まちづくり協働フォーラム」でそれぞれ基調講演をおこない、同市と大学の交流は一層の活況を呈し、それがこのような形で結実したといえる。

【本プログラムの内容と意義】

これを機に、「お窯プロジェクト・イン・常陸太田」を連携の基幹事業のひとつとすることを提言したい。この計画は、「火」の始原的な力によって、人々に集いの場を提供し、必要な物を生み出し、資源を循環的に活かすことができる4種類のお窯、
・調理用の石窯（各種のパン焼きや各種肉のロースト）
・炭焼き窯（木炭、竹炭の制作）
・登り窯（食器や祭器、陶板の制作）
・竈（「炊く」・「蒸す」・「煮る」の各種調理）を地域再生のシンボルとして復活させ、それらを適宜利用しながら里山の3つの基本要素、「木」・「土」・「水」の再生プログラムと里山の「命」の連鎖を考える食育プログラムを実施していこうとするものである。その際、先ず常陸太田市の中から地域再生のモデルケースとなる地区を選定し、そこをフィールドに、本学の教員・学生が、その地域に関わる各種団体の協力を得て、その地で培われた様々の貴重な知恵・技を持つ達人たちに学びながら、小中高生（基本的にはその地域に在住する生徒）と共に下記の3つのプログラムに取り組んでいく予定である。

(1)「木」の再生：里山での生態系の自然学習とキノコ・山菜採り。これらの実践を通じて、里山への現状把握と愛着を深める。また、市の産業観光課の企画になる「竹取物語」と合流しながら、河川敷や山林を我が物顔に占拠する竹林の間伐と整備の実施。

①：山の幸の学習と採取。石窯や竈を利用した調理。その料理に相応しい食器の制作
②：森や竹林の整備と散策道の設置（登り窯による敷石用の陶板制作）
③：竹材を利用した炭焼き窯による竹炭作りと竹垣作り。その利用による地域の景観美化。

(2)「土」の再生：耕作放棄地を利用しての、県北の特産品である蕎麦・米・小麦などの農作物の栽培から収穫、調理までを実践体験する。耕作放棄地の再生を考えるNPO団体「With You」および、県北各地で実施されている蕎麦打ち体験と合流しながら、

①：蕎麦の耕作と収穫したそば粉を利用した蕎麦打ち体験や、この地の産物を組み合わせ

た新製品の開発（例えば、巨峰とその酵母菌を使った石窯焼き特製巨峰パン）

②：収穫祭の実施。地域共同体の精神的な拠り所となっている社寺の縁起に関する学習と神域の清掃。収穫した蕎麦・米・小麦の奉納。奉納用の祭器の制作

③：竹炭や枯葉を利用した土作り。

(3)「水」の再生：常陸太田の里山の各所には大小様々な滝が存在し、川の水源になるとともに、水のある豊かな自然風景を形作っている。しかしこれらの滝が、倒木や土砂による水のせき止め、滝壺周辺の樹木の繁茂による苔の枯死によって本来の姿を失いつつある。

①：滝付近の整備と清掃、および竹炭による水の浄化。

②：滝の景観を愛でながら、滝の水と県北地域のお茶を使った茶会の開催。茶器の制作。

③：水源から下流までを歩く徒歩会の開催と各地点での水質と生態の調査。

以上3つのプログラムのうち、本学からは、「食育」関連プログラムについては健康栄養学科と地域政策学科が、「景観再生」関連プログラムについては地域政策学科とヒューマンサービス学科が、「お窯ネットワーク」の構築、各段階における情報発信やドキュメンタリー制作についてはコミュニケーション学科が、それぞれ活動の中心として当たることになっている。

茨城県出身者が圧倒的な多数を占める本学の学生達と常陸太田に在住する小中高生が共に、地域に在住する達人を教授者とする里山の3つの「再生」プログラムを体験していくことにより、地域の自然・食・文化の特性を体験・理解することを第一目標とする。次にその実践の中から、現状が抱える問題点を発見し、その解決策を地域の人々と共に考え、その成果を全国に発信できる能力を培うことを第二目標とする。そして将来的に、地域を担う知恵と指導力を持つ人材を育成することを最終目標としている。

この現地実践型の「お窯プロジェクト」と併せて、常陸太田市と常磐大学の共同主催になる公開シンポジウムの開催と「お窯ネットワーク」の構築を提案する。より具体的には、

(1) 常陸太田の各地域の現状と問題点を明らかにし、大学と地域の連携の可能性を具体的に探っていくため、常陸太田市民と常磐大学の希望者が参加できる公開シンポジウムを常陸太田市で開催する。

(2) 常陸太田の各所に点在するお窯の所有者や管理者、それに「お窯プロジェクト」遂行に協力可能な地域の達人の人材登録と相互

の情報交換、それにお窯の相互利用を目指す「お窯ネットワーク」の構築。その拠点を常磐大学と常陸太田市役所の2か所に設ける。

尚、お窯の利用や制作については、当面のところ、お窯を既に備えている「里見ふれあい館」と「自然休養村」を拠点として利用する予定。お窯の追加制作に必要な資金については、現在、三菱財団の研究助成に応募申請中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ①水野哲雄、「芸術基礎におけるワークショップ・ラーニング その2」、『京都造形芸術大学紀要』、9号、pp.279-288、2005年、査読有
- ②森田美穂、「多世代の交流による参加型造形ワークショップ」、『里山から見える世界』、pp.159-171、2005年、査読有り
- ③原田憲一、「地域生活に関わる地質」、『地域学』、pp.74-89、2005年、査読有
- ④原田憲一、「モノから時間を読む」、『モノ学・感覚価値研究』、pp.79-86、2006年、査読無
- ⑤水野哲雄、「芸術基礎におけるワークショップ・ラーニング その3」、『京都造形芸術大学紀要』、10号、pp.252-260、2006年、査読有
- ⑥原田憲一、「美の化石美術館」、『京都造形芸術大学研究紀要』、12号、pp.367-370、2008年、査読有

[学会発表] (計 2 件)

- ①原田憲一、「比較文明学における地質学視点の重要性」、比較文明学会、2008年10月26日、山形大学農学部
- ②原田憲一、「京の都の資源学」、国際協と学体系研究会、2009年1月17日、京都弥生会館

[図書] (計 2 件)

- ①原田憲一、「地球フロンティア」、『科学に生きる』、pp.131-196、2007年、リブリオ出版
- ②原田憲一、「地球時代の文明学」、2008年、pp7-38、京都通信社

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他] (計 1 件)

<http://mnakaji@mta.biglobe.ne.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松原 哲哉 (MATSUBARA TETSUYA)
常磐大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 60351368

(2) 研究分担者

原田 憲一 (HARADA KENICHI)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 90134147

椎原 保 (SHI IHARA TAMOTSU)
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号: 80411312

中路 正恒 (NAKAJI MASATSUNE)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 40188941

上村 博 (UEMURA HIROSHI)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 20232796

水野 哲雄 (MIZUNO TETSUO)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 80259423

森田 実穂 (MORITA MIHO)
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号: 00368060

曾和 治好 (SOWA HARUYOSHI)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 50261110

藤村 克裕 (FUJIMURA KATSUHIRO)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 20411308

坂本 洋三 (SAKAMOTO HIROMI)
オークランド大学国立創造芸術及び産業研究所研究員
研究者番号: 70373107

(3) 連携研究者

なし
研究協力者
寺村 幸治 (TERAMURA KOUJI)
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師